昭和63年度厚生省心身障害研究
「家庭保健と小児の成長・発達に関する総合的研究」

乳幼児の食行動に影響を及ぼす養育条件に関する研究

（分担研究：小児期の成長・発達と養育条件に関する医学的、心理学的及び社会学的研究）

八倉巻和子*、村田輝子*、森岡加代*、大場幸夫*、
大森世都子**、高野　陽**、高石昌弘***、水野清子****

要約

乳幼児の食行動と母親の養育態度について縦断的に追跡し、発達・変化の状態を捉え、母子相互交渉についても検討した。

調査対象：A施設（母親に育児指導を行っている施設）とB施設（私立保育所）の園児38名。

調査時期：昭和62年10月から昭和63年10月。A施設は3カ月ごと、B施設は2カ月ごとに調査を実施。

結　　果

1. 食物摂取の実態
   (1) 現在与えている食品：4～5カ月に与えている食品は25種で、月齢とともに増加し20カ月には延べ120種となっている。4～5カ月には、澱粉性の食品・納豆・卵黄・乳酸飲料・白身魚・野菜・果物を、肉類・油脂類・脂肪の多い魚類は6カ月以降に与えている。
   (2) 食品数：一人当たり平均食品数は5カ月15種、9カ月40種、13カ月60種であり、5～9カ月の増加が著しい。
   (3) 調理形態：米の調理は月齢が進むにつれて「重湯」から「かゆ」そして「ごはん」へと変化し、調理形態の順序性がみられた。卵の調理は「軟らかい」から「硬い」の調理法の順序性はみられない。
2. 食行動の追跡
   (1) 月齢別食行動：スプーンや哺乳びんを持つのは8～10カ月頃になる。飲む行動は10～15カ月になると「哺乳びん飲み」から「コップ飲み」へと発達する。また「噛んで飲み込める」は8～13カ月、「固形食が食べられる」は8～14カ月に現れ、「一人で食べる」は18カ月頃にできるものが多い。
   (2) 訴えのあった食行動：母親が困ると訴えのあった乳幼児の月齢別の食行動については、14～18カ月の訴え率が35.7％と最も高率である。訴えのあった食行動は13項目であり、中でも「食品の好き嫌い」は最も多く、14～18カ月に高率である。「噛んでも口から出す」は月齢が進むにつれて高率となる。また「食事に時間がかかる」は各月齢ともにみられ、「食事量が少ない」は14カ月以降が高率である。「アレルギーがある」は、5～18カ月の間の各月齢ともに4～5％みられる。

*大妻女子大学家政学部（Faculty of Home Economics, Otsuma Women's Univ.）
**国立公衆衛生院母性小児衛生学部（Dept, of Maternal and Child Health, The Institute of Public Health）
***国立公衆衛生院（The Institute of Public Health）
****日本総合愛育研究所（Nippon Aiiku Research Institute for Maternal Children Health & Welfare）

3. 母子相互交渉からみた食生活

母子相互交渉は、子どもの生活場面における要求・習慣化・興味と母親の子どもへの理解・対応・円滑の6項目の関係について検討した。

(1) 母子関係が良好な場合は、児の食行動上の問題が少ない傾向にある。

(2) 母子関係がぎこちない場合は、児の食行動上の問題が多い傾向にある。

見出し語：乳幼児、食行動、母子の相互交渉

Ⅰ はじめに

乳幼児期の食生活は、栄養補給のみでなく、食行動や食嗜好の発達を促し、基本的な食習慣を形成し、食を通して人間形成にも及ぶと考えられる。従って、養育にかかわる者は、子どもの食行動の発達過程を充分理解し、適切な対応をすることが望まれる。

乳幼児の食行動は、乳汁の吸啜から咀しゃくによる摂食行動へと発達し、くり返し体験することによって人としての食行動に近づいていく。

近年、「噛めない」「飲み込めない」などの咀しゃくにかかわる問題や、「食欲がない」「食品の好き嫌い」など食事にかかわる問題が増えているとの報告[1)-8)]もあり、保育現場からの訴えも多くなっている。

養育環境や養育者の態度は、これらの食事にかかわる行動に大きな影響を与えていると考えられる。とくに、母親の養育態度・食意識が子どもの食行動の発達を促し、養育態度如何によっては摂食障害を起こすとも考えられる。

1986年に発表された日米の「母親の態度・行動と子どもの知的発達」によると、「子どもの知的発達と母親の態度・行動はかなり深く関係し、子どもにプラスに働く母親の要因の中核になるものは、子どもに対する暖かさ、受容、配慮などである」と述べている[9)]。母親の養育態度、養育環境そして子どもへの積極的な働きかけは、母子の関係のみならず、乳幼児の心身の発達や人間形成にも関係すると思われる。

本研究は、子どもの養育環境、食事状況および食行動を捉え、さらに、母親の養育態度を検討し、乳幼児の食行動と養育条件との関連を検索した。

Ⅱ 昭和61年・62年度研究の概要

昭和61年10月に、乳幼児の食行動に母親の養育条件がどのようにかかわっているかを捉えることを目的として調査を実施した。

調査対象は、秋田・千葉・東京・富山そして岡山の保育所児・幼稚園児、0～6歳児2,032名とした。

調査項目は、養育環境・食事状況および母親の養育態度について設問した。

1. 昭和61年度結果の概要（第1報）

昭和61年度は、調査で得られた資料を年齢別に分類し、児の食行動、母親の養育態度とその評価、そして食行動と養育条件の関連を分析した。

(1) 児の食事上の問題行動のうち、「遊び食べ」「ちらかし食べ」などの食事状態に関する項目は年少児に、「偏食」や「食事の速さ」などに関する項目は年長児に高率であった。

(2) 児の食事上の問題行動は、きょうだいの有無、出生順位、母親の養育態度などに関係することがわかった。

2. 昭和62年度結果の概要（第2報）

昭和62年度は、保育所児1,185名のみを対象とし、秋田・千葉・東京・富山・岡山の5地域について、地域別に検討した。

(1) 食事については、「栄養」に重きを置く4地域に比べて、出稼ぎの多い秋田は「家族の団らん」に留意しており、地域の特性がみられた。

(2) 食行動上の問題の出現率は、東京・富山が高率であり、問題行動の主なものは、秋田と千葉が「姿勢」、東京が「食事の時間」、富山が「食事の量」、岡山が「偏食」など地域の相違がみられた。

(3) 養育条件と食事行動の関連では、祖母との

同居、母親の職業の有無、養育態度などについて地域による相違が認められた。

昭和61年、62年の研究により児の食行動にかかわる母親の養育態度を横断的に捉えることができた。

しかし、児の食事上の行動は、それぞれの年月齢に一時的に発生するものであるか、あるいは後に残す行動であるかが問題となる。そのため月齢の発育段階に出現する行動であっても、月齢が進むに従って消失するものもあり、その状態は横断的調査では捉えることはできない。

そこで、次年度は条件を同じくする園児を対象に縦断調査を行い、食行動の変化と母親とのかかわりについて追跡することが必要であると考えた。

Ⅲ　昭和63年度研究（第３報）

乳幼児の食行動は、心身の発達に伴い変化するであろうし、母親の養育態度についても児の発育経過とともにその対応のあり方が異なってくると考えられる。

「母子関係の乳幼児発達への影響ということを検討する場合、人間の生きていく速度に従って追跡していくことであり、縦断的手法を用いることに意義がある」と古沢[10]は述べている。とりわけ乳幼児の食行動は、行動の状態やその出現時期などには個による相違が認められ、平均的に評価してしまうことはできない。

昭和63年度は、同一条件にある乳幼児の食行動と母親の児への対応について縦断的に追跡することにした。

調査対象および方法

(1)　調査対象：対象は表１に示す通り、A施設、B施設の38名である。

A施設は、母親に対して定期的に食生活や栄養などの育児指導を行っている施設である。

表１　調査対象　（名）

	男　児	女　児	合　計
A施設	11	13	24
B施設	7	7	14
合　計	18	20	38

B施設は、乳児のみを８時間保育している私立保育所である。

(2)　調査時期：時期は昭和62年10月から63年10月までの13カ月。A施設は３カ月ごとに、B施設は２カ月ごとに継続的に調査した。

(3)　調査方法：方法は所定の調査票を作成、調査月ごとに各施設を通して配布し、母親に留置記入を依頼した。調査票は期間中同一形式の用紙を用いた。

(4)　調査項目：次の項目について設問した。

- 対象児の概要……身体状況、養育環境
- 乳幼児の食行動…食物の摂取状況
  摂食行動の状態
- 母子相互交渉……児の食事と排泄に関する状態
  児の食事と排泄に対する母の対応

(5)　集計方法：各調査項目について、調査月ごとに個人を追跡し集計した。さらに、対象児を月齢別に分類して集計した。

結　　果

・対象児の概要

対象児の身体状況ならびに養育環境は次の通りである。

(1)　身体状況

①　健康状態

対象児の健康状態は、表２に示す通りである。調査期間を通して健康であった児は47.4％であり、何んらかの症状がみられた児は52.6％である。症状のうち最も多いのはかぜの39.0％であり、次に湿疹26.0％、発熱15.8％である。さらに症状が２つ以上ある児は、26.3％ みられた。

②　身長および体重

対象児の月齢別身長および体重は表３に示す通りである。

男児と女児を比較すると、19カ月までは身長・体重ともに女児の方が上回っている。

昭和55年乳幼児身体発育値[11]のパーセンタイルに当てはめてみると、10パーセンタイルから90パーセンタイルの範囲にある児は身長で92.1％、体重で76.5％みられる。10 パーセンタイ

ル以下の児は、身長では5.3％と少ないが、体重では10.5％みられる。また、90パーセンタイル以上の児は、身長では2.6％、体重では13.2％いることがわかった。

③　月齢別の歯数（表4）

一人平均歯数は、5～6カ月が0.7本、9～10カ月4.9本、13～14カ月7.7本、17～18カ月13.8本、19カ月以上17.0本であり、月齢とともに増加しており、とくに14カ月以降の増え方が大きい。

(2)　養育環境

母親の年齢と児の面倒をみる人については、表2に示す通りである。

①　母親の年齢

母親の年齢は、20歳代57.9％、30歳代36.8％、40歳代5.3％であり、平均年齢は29歳となる。

②　児の面倒をみる人

児の面倒をみる人は、父と母が42.1％、父と母と祖父母またはきょうだい18.4％、養育に第3者が加わっているのは39.5％ある。第3者のうち最も多いのは、保母58.9％、次いでベビーシッター35.3％である。

1.　乳幼児の食行動の追跡

(1)　食物摂取の実態

乳幼児の食物摂取の状況を追跡的に捉え、月齢段階ごとに現在与えている食品・食品数・調理形態について検討した。

1)　与えている食品

表2－1　対象児の概要

〔A施設〕

対象児 性別－No.	月齢（カ月）	母の年齢（歳）	健健状態	体重	子どもの面倒をみる人 父母	祖父母	きょうだい	保母	ベビーシッター	その他
1－1	5～17	29	良好	やせ	○					
1－2	5～17	27	良好		○	○				
1－3	5～17	28	湿疹		○			○		
1－4	6～17	34	かぜ、湿疹		○	○			○	
1－5	6～17	26	良好		○					
1－6	5～17	32	良好		○					
1－7	5～17	28	下痢		○					
1－8	5～17	34	かぜ、発熱、湿疹		○					
1－9	5～17	28	良好		○					
1－10	5～17	26	良好		○	○				
1－11	5～17	24	下痢、発熱		○					
2－12	5～17	27	かぜ		○	○				
2－13	5～17	28	良好		○					
2－14	5～17	33	湿疹		○					
2－15	5～17	35	かぜ		○					
2－16	5～17	32	良好		○					(○)
2－17	5～17	28	かぜ	肥満	○	○		○		
2－18	5～17	30	湿疹	やせ	○	○				
2－19	5～17	30	良好		○	○				
2－20	5～17	27	良好		○					
2－21	6～17	30	良好		○	○				
2－22	6～17	34	良好	肥満	○					
2－23	6～17	27	良好		○					
2－24	6～17	27	かぜ		○					

性別　1…男児　2…女児

表２－２　対象児の概要

〔Ｂ施設〕

対象児 性別－No.	月齢（カ月）	母の年齢（歳）	健康状態	体重	子どもの面倒をみる人 父母	祖父母	きょうだい	保母	ベビーシッター	その他
1 － 1	4 ～ 20	27	良　好	やせ	○		○			
1 － 2	6 ～ 19	41	かぜ、発熱		○				○	
1 － 3	9 ～ 21	31	かぜ、発熱、吐く	肥満	○		○	○		
1 － 4	10 ～ 18	31	かぜ、湿疹		○	○		○		
1 － 5	16 ～ 25	27	かぜ、湿疹		○	○		○		
1 － 6	3 ～ 15	29	かぜ		○	○		○	○	
1 － 7	2 ～ 12	29	かぜ、湿疹、発熱		○	○	○		○	
2 － 8	6 ～ 18	28	かぜ		○		○		○	
2 － 9	7 ～ 19	22	かぜ、吐く、湿疹	肥満		○		○		
2 － 10	7 ～ 19	28	良　好	やせ	○	○		○	○	
2 － 11	9 ～ 18	27	良　好		○	○				
2 － 12	14 ～ 20	41	かぜ、発熱、湿疹	肥満	○	○				
2 － 13	17 ～ 26	33	良　好		○	○		○		
2 － 14	6 ～ 18	34	良　好		○	○	○	○		

性別　1…男児　2…女児

表３　対象児の平均身長・体重

月齢（カ月）	男児 身長(cm)	男児 体重(kg)	女児 身長(cm)	女児 体重(kg)
5	64.9	7.29	65.1	7.45
7	67.2	7.30	68.2	8.16
9	70.9	8.10	69.9	8.40
11	74.0	10.1	72.0	8.35
13	75.0	10.2	74.2	8.50
15	76.0	10.5	75.5	9.40

表４　月齢別乳歯の歯数

月齢	１人平均歯数	最小－最大の歯数
5～6カ月	0.7本	0－6本
7～8	2.3	0－8
9～10	4.9	2－8
11～12	6.4	4－10
13～14	7.7	4－13
15～16	10.8	8－16
17～18	13.8	8－20
19～20	17.0	16－20
21～	17.0	16－20

母親が与えている食品を月齢別にみると表５に示す通りである。

２～３カ月に与えている食品は僅か１種のみであるが、４～５カ月になると26種に増加している。それ以降累積的に増加して６～７カ月には48種、８～９カ月88種、10～11カ月93種、12～13カ月には109種となり、調査期間中に母親の与えた食品は延べ120種となっている。

離乳期の食品は、食べやすい状態であればどのような食品から与えてもよいとされているが、対象児の場合どのような順序で食物を体験しているかを、44食品について月齢別に示し検討した。（図１）

米・パン・うどんなどの穀類は、４～５カ月にどの児も与えられている。スパゲティは、５カ月から与えられているが、13カ月になって与えられている児もみられ、その月齢に幅がある。その他の麺類は、マカロニが８カ月、ラーメン12カ月でうどんと比べて遅い月齢に与えられている。芋類では、じゃがいもが最も早い月

表5　月齢別与えている食品

月齢(カ月)	累積食品数	食　　品　　名
2 ～ 3	1	じゃがいも
4 ～ 5	26	米、パン、うどん、スパゲティー、植物油、豆腐、納豆、みそ、しらす干し、かれい、ひらめ、鶏肉、魚肉ソーセージ、卵黄、チーズ、乳酸飲料、のり、とろろこんぶ、キャベツ、たまねぎ、だいこん、トマト、レタス、ブロッコリー、かぼちゃ
6 ～ 7	48	コーンフレーク、そうめん、さつまいも、バター、煮豆、きなこ、たい、さけ、いわし、さば、はんぺん、豚肉、牛肉、レバー、牛乳、ヨーグルト、アイスクリーム、わかめ、きゅうり、なす、ほうれん草、にんじん
8 ～ 9	88	マカロニ、さといも、マーガリン、生あげ、がんもどき、凍豆腐、さんま、うなぎ、ちくわ、ツナ缶、かます、あなご、たら、いさき、ほたて貝、さけ缶、かき、ハム、全卵、うずら卵、生クリーム、わかめ、ひじき、しめじ、なめこ、ごぼう、はくさい、もやし、カリフラワー、長ねぎ、かぶ、グリンピース、セロリ、いんげん、とうもろこし、こまつな、ピーマン、オクラ、さやいんげん、ゆり根
10 ～ 11	93	油あげ、えび、魚肉ソーセージ、きんめだい、ニラ
12 ～ 13	109	ラーメン、ふ、山いも、マヨネーズ、おから、かまぼこ、さつまあげ、いくら、たらこ、しいたけ、マッシュルーム、たけのこ、かぶの葉、チンゲン菜、アスパラガス、ピーナッツ
14 ～ 15	116	オートミール、つみれ、ちくわ、いか、すじ、まぐろ、ソーセージ
16 ～ 17	117	れんこん
18 ～ 20	120	ししゃも、たこ、カップヌードル

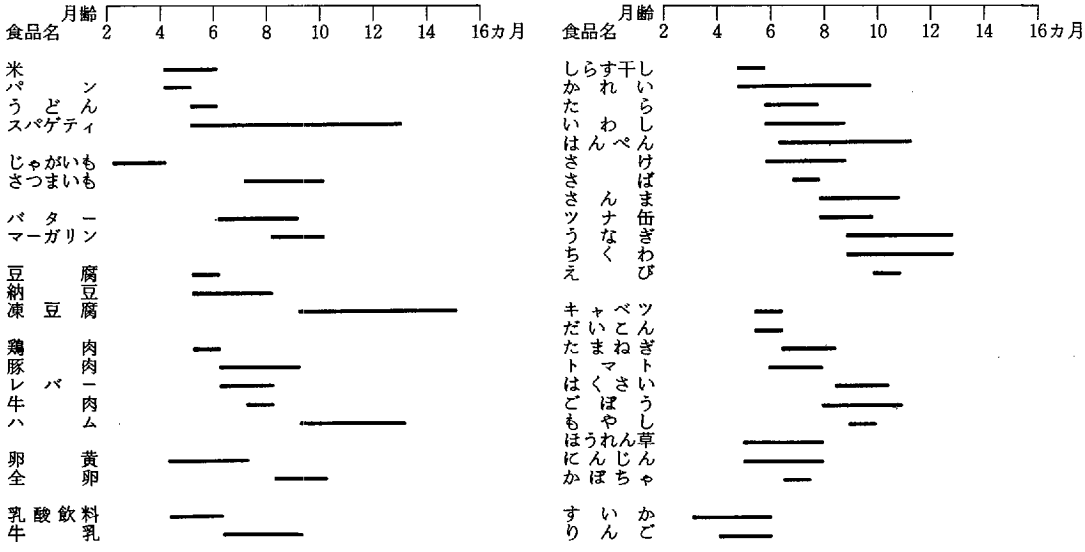

図1　月齢別与えている食品

齢に与えられている。さつまいもやさといもは7～8カ月、山いもは12カ月と遅い月齢に与えられている。油脂類では、植物油が4カ月に、バター6カ月、マーガリンは8カ月に与えられている。大豆製品は、豆腐・納豆・みそが5カ月、加工品の生あげ・がんもどきなどは8～9カ月に与えられている。肉類では、鶏肉が5カ月から、豚肉・レバー・ハムは6～9カ月に、ベーコンやコンビーフは12カ月以降に与えられている。魚類では、しらす干しやかれいは5カ月から与えられており、いわし・さんま・さばなど脂肪量の多い魚類は6～8カ月、うなぎは9カ月、魚の加工品は10カ月以降となっている。とくに、かれい・はんぺん・うなぎ・ちくわなどは与える月齢に4～5カ月間の幅がみられる。卵類では、卵黄が4カ月、全卵は8カ月に与えられている。乳製品の中で最も早い月齢(4カ月）に与えられているのは乳酸飲料で、牛乳・ヨーグルト・アイスクリームなどは6カ月からとなっている。野菜類では、5～6カ月にキャベツ・だいこん・たまねぎ・トマト・ほうれん草・にんじん・かぼちゃなどが与えられており、8カ月以降には、はくさい・ごぼう・もやし・ニラ・たけのこなどが与えられている。

2） 食品数の増加

最近、離乳期に各栄養素の補給を単一の食品で摂る傾向がみられ、アレルギーの一因ともなっている。摂取食品を増やし、何でも食べられるようにすることは児の心身の健康を維持するとともに、摂食行動の発達を促す上からも大切なことである。

離乳期には、乳児の摂食能力に応じて徐々に食品の種類を増すことが肝要と考えられる。

対象児一人ひとりの食品数について月齢ごとに検討し、図2、図3に示した。

月齢ごとの平均食品数は、5カ月の時点では15種であるが、9カ月には40種、13カ月60種、17カ月69種、19カ月には78種となり、月齢が進むに従い食品数が増加しており、5～19カ月の間に5倍に及んでいる。

月齢間の食品数の増加は、5カ月から9カ月の間が最も著しく、離乳の前期から中期にかけて多種類の食品を経験している状態がわかった。

しかし個別にみると、対象児の中には食品数がある月齢時に不安定な摂取の状態を示すものがあり、38名中5名みられた。その理由を検討するために、次の事例をあげる。

〔事例〕

① 食品数がある月齢に減少した児の場合

。女児…12カ月以降に食品数が減少し、その頃から「噛んでも口から出す」の行動がみられた。

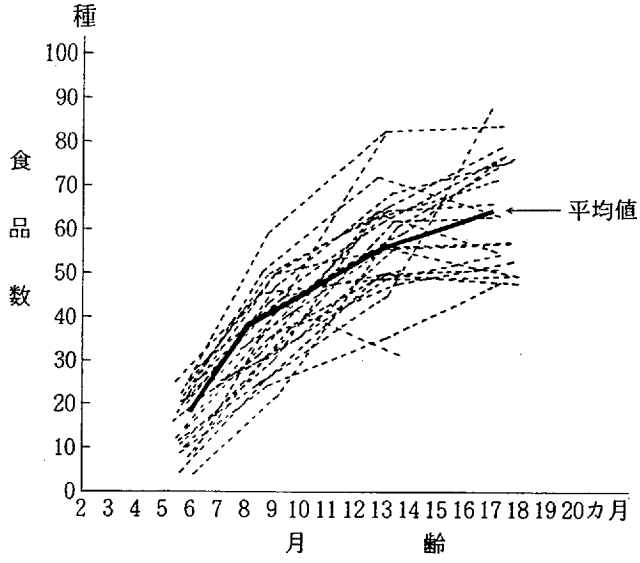

図2 月齢別食品数〔A施設〕

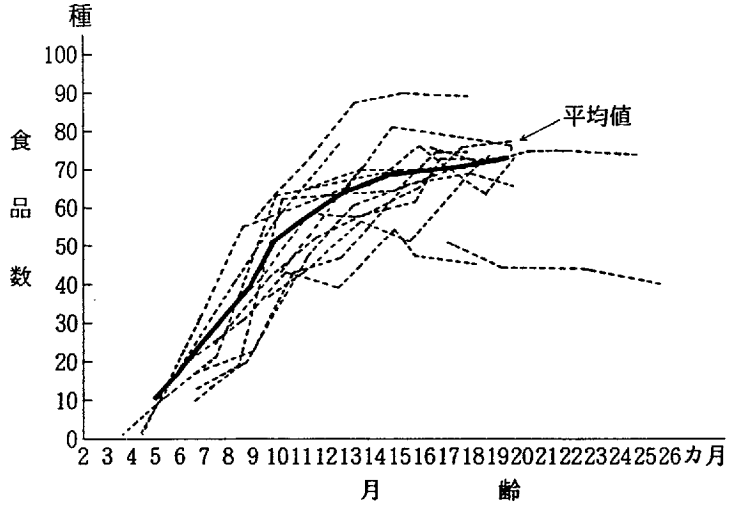

図３　月齢別食品数〔Ｂ施設〕

◦男児…食事については、「量が少ない」「時間がかかる」などの問題行動がみられるが、母親は児の食行動に無関心で放任している。体重は10パーセンタイル以下と低い。

②　食品数の増減があり、その後増えない児

◦女児…10カ月までは、食品数が順調に増加していたが、それ以降増減を繰り返しており、平均の食品数を下回っている。とくに、肉類・魚類・野菜類の食品に増減が顕著である。各月齢に「噛んでも口から出す」の行動がみられ、かぜをひきやすい。

◦男児…「食品の好き嫌い」や「食事量が少ない」などの行動がみられる。健康状態はかぜ・湿疹・発熱などがみられ、体重も少ない。

③　食品数が急激に増加した児

◦男児…月齢の低い時期に食品の好き嫌いがみられたが、その後何でも食べられるようになり、食品数も増えてきた。

以上の事例から乳幼児の食行動の発達を阻む理由として３つの問題があげられる。

◦摂食行動上の問題がある場合

◦食事上の行動に問題がある場合

◦母親の養育態度に問題がある場合

3)　調理形態の変化

離乳食の調理は、基本的には軟らかいものから徐々に硬いものへと段階的に進めていく。乳幼児の咀しゃく能力の発達を促すためにも、重湯やジュースのような液体状のものをいつまでも与えることは好ましいことではない。種々の食品を与える場合にも、乳幼児の発育状態に見合う食品の種類や調理の方法があると考えられる。

乳幼児に与えられている食品の調理形態について、一般的に用いられる“米”“卵”“じゃがいも”をとりあげ、月齢別に検討した結果は図４・５・６に示す通りである。

米の調理については、「重湯」「つぶしがゆ」「軟らかがゆ」「硬がゆ」「軟飯」、そして「ごはん」の６段階の調理変化をみた。

「重湯」は、５カ月では28％、８カ月に18％の児に与えられており、月齢とともに減少している。「つぶしがゆ」は、５カ月では50％、７カ月28％で、９カ月まで与えられている。「軟らかがゆ」は、５カ月15％、６～８カ月には31％の児に与えられているが、９カ月になると６％と減少している。「硬がゆ」は、６カ月は４％、７・８・９カ月はそれぞれ21％与えられている。「軟飯」は、７～８カ月は８～15％の児に、10カ月には61％の児に与えられており、７～12カ月と長期間与えられている。「ごはん」は９カ月に15％、12カ月になると総ての児に与えられている。

米の場合、調理形態は月齢に従って「重湯」から「ごはん」へと調理法が変化しており、調

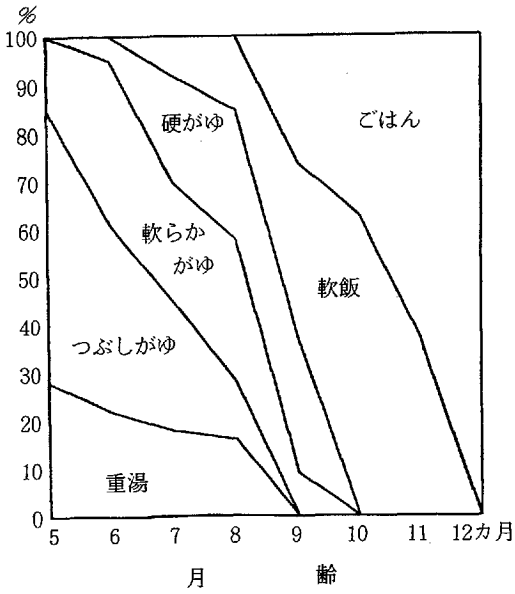

図4 「米」の調理形態

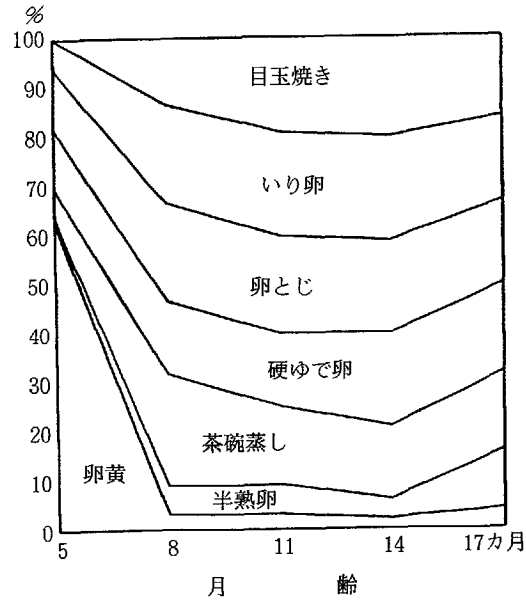

図5 「卵」の調理形態

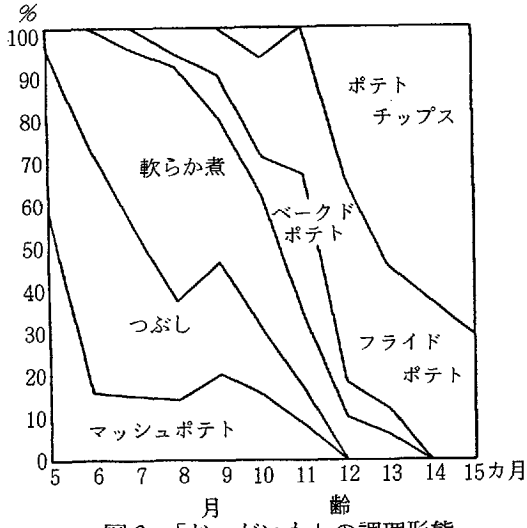

図6 「じゃがいも」の調理形態

理形態の順序性がみられた。

卵の調理形態については、図5に示すように7段階について検討した。「卵黄」の調理は、5カ月の時点では60%であるが、8カ月になると2%に減少し、17カ月までみられる。また、他の「半熟卵」「茶碗蒸し」「硬ゆで卵」「卵とじ」「いり卵」「目玉焼き」は各月齢ともに与えられており、卵の調理形態については「硬さ」の順序性はみられなかった。

じゃがいもの調理形態については、「つぶし」の形態から「煮る」「揚げる」までの6段階についてみた。「マッシュポテト」と「つぶし」は、5カ月から12カ月の間に与えられている。「軟らか煮」は、5カ月から14カ月までみられ、8カ月前後に与えられている比率が高い。「ベークドポテト」は、7カ月から14カ月にみられるが、他の調理法に比べて与えられている比率は少ない。「フライドポテト」は、9カ月から、「ポテトチップス」は9カ月から与えられている。じゃがいもの場合、油を用いた調理法は月齢の高い時期に与えられていることがわかった。

(2) 乳幼児の食行動

乳幼児の食行動については、月齢別の食行動の発達と母親から訴えのあった食行動について検討した。

1) 月齢別食行動の発達

乳幼児が“一人で食べる”に至るには、「吸う」から「咀しゃく」へと移行することに加えて、食行動に必要な手の運動発達との関連も見逃すことはできない。

対象児の食行動について、「飲む」「噛む」「飲み込む」への移行と「持つ」の行動の発達を月齢ごとに検討した。結果は図7に示す通りであ

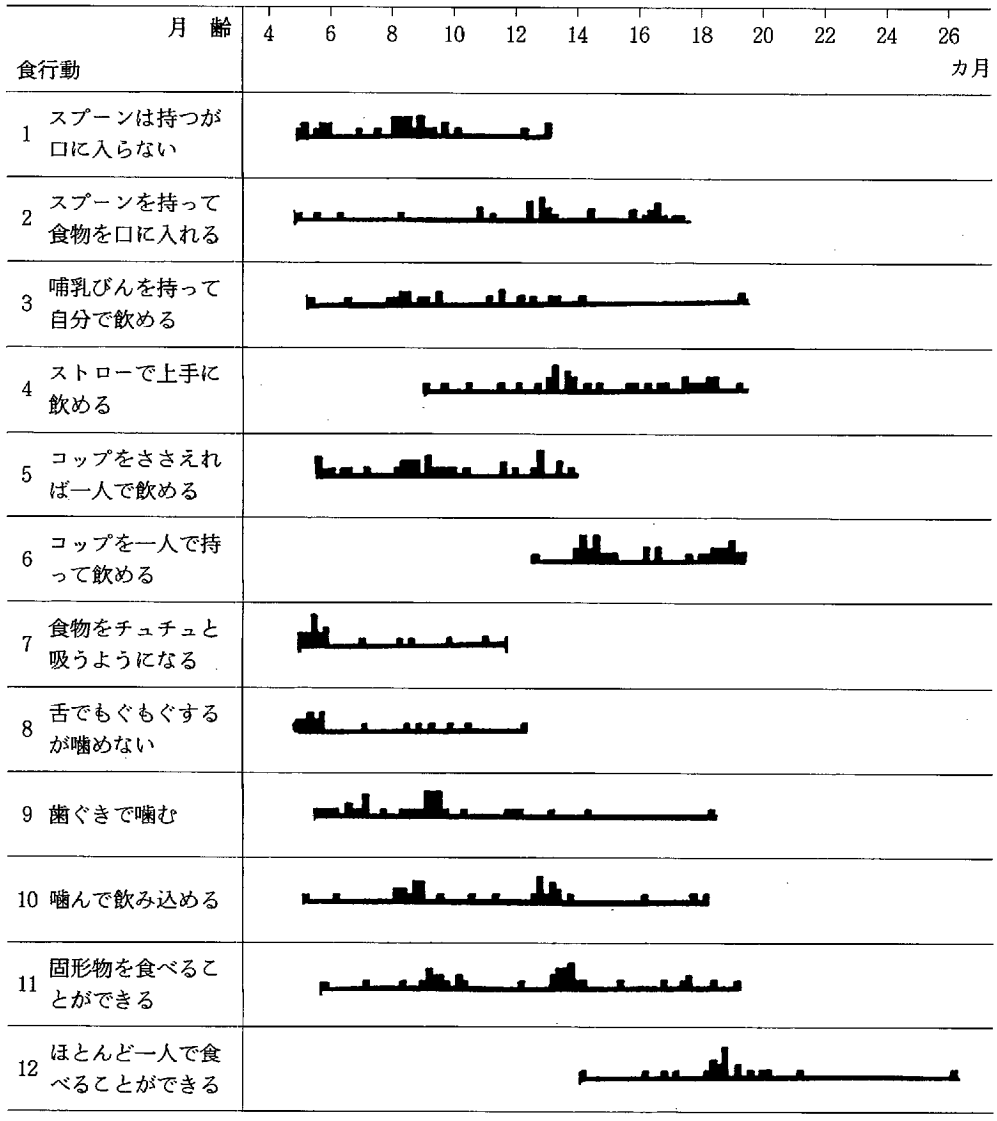

図7　月齢別食行動

る。

食行動のうち持つの行動については、「スプーンを持つが口に入らない」は5カ月頃からみられるが、8～10カ月になると78%の児ができるようになる。「スプーンを持って口に入れる」ことができるのは、12～14カ月である。また、「哺乳びんを持って自分で飲める」は、8～9カ月に54%の児ができるようになっている。「スプーンを持つ」や「哺乳びんを持つ」などの持つ行動は、8～10カ月頃できるようになり、手の機能発達と合致していることがわかった。

飲む行動をみると、「哺乳びんで飲む」ことから「ささえられてコップ飲み」ができるようになるのは8～10カ月である。また「ストローで上手に飲める」のは12～14カ月、「コップで一人飲み」ができるのは14～15カ月である。飲む行動は、「哺乳びんで飲む」から「ささえられてコップ飲み」「ストロー飲み」そして「一人で飲む」へと段階的な発達がみられた。哺乳びん以外のものから飲むことの練習期間は8～10カ月頃から始まり、14～15カ月頃には一人で飲めるようになると判断することができる。

噛む・飲み込むの咀しゃく行動では「食物をチュチュと吸う」と「舌でもぐもぐするが噛めない」児は、5～6カ月に最も多い。「歯ぐきで噛む」は8～10カ月、「噛んで飲み込める」と「固形食を食べることができる」は、8～14カ月にそれぞれの行動が現れている。咀しゃく能力については、「食物をチュチュと吸う」から「固形食をたべることができる」へと段階的に発達している様子がうかがわれる。

「ほとんど一人で食べる」は、18カ月頃にできる児が多く、「一人で食べる」に至るのは18カ月以降と思われる。

2) 訴えのあった食行動

児の食行動について、困ったことがあると答えた母親に問題となる食行動を複数回答してもらった。(表6)

調査期間中、食行動に問題のなかった児は44.3%、問題のあった児は55.7%である。

表6 「困ったことのある」食行動

食べる量が少ない	かたいものが噛めない
食べるのに時間がかかる	よく吐くことがある
アレルギーがある	やわらかいものしか食べない
嫌って食べない食品がある	食べると下痢をする
特定の食品ばかり好んで食べる	いやいや食事をする
口の中にためて出す	その他

その他……遊び食べ、食事中騒ぐ、食べすぎ、食欲にむらがある、噛まずに吸う、塩味を好む、食べさせてもらいたがる

母親から訴えのあった食行動の項目は、「食事時間」「食事量」「食品の好き嫌い」「咀しゃく」「アレルギー」および「その他」として「遊び食べ」「食事中騒ぐ」「食べすぎ」など延べ13項目があげられている。訴えのあった食行動を月齢別にみたのが図8である。

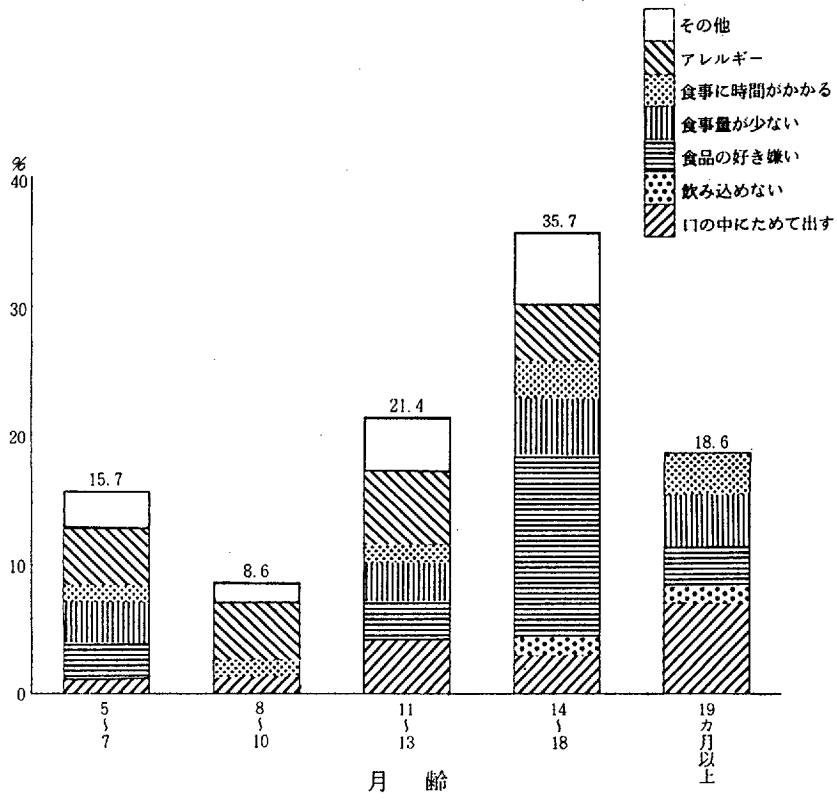

図8 月齢別訴えのあった食行動

月齢別の訴え率は、14～18カ月が35.7％と最も高く、次いで11～13カ月21.4％、19カ月以上18.6％の順であり、10カ月以前の訴え率は少ない。

「飲み込めない」や「口にためて出す」は、月齢が進むに従って多くなり、とくに19カ月以上に高率である。「食品の好き嫌い」は、14～18カ月に最も高率である。「食事量が少ない」は8～10カ月を除いた各月齢に3～4％みられる。「食事に時間がかかる」は、14カ月以降の年長児に訴え率が高い。「アレルギーがある」は、5～18カ月までの各月齢に4～5％みられる。「その他」の遊び食べ・食事中騒ぐなど、食事状態に関するものは、8カ月以降18カ月まで増加しているが、19カ月以降にはみられない。

考察

1. 食品を与える時期および調理形態について

離乳の定義が確立される以前は、小児の乳汁から固形食への移行が定まっておらず、長期授乳の弊害から断乳という形で離乳食への移行が進められていた。

今日では、母親の生活条件や育児意識の変化などから、固形食を与える時期が乳児の生理機能を超えて早まっている傾向がみられている。

本調査では、母親が児に与える食品について与える時期・食品の種類・調理形態について検討した。

与える時期については、離乳研究班が実施したアンケート調査[12]や保健所で指導に用いている資料および西村の調査結果[13]によると、穀類4～5カ月、いも類4～6カ月、油脂類4～7カ月、豆腐4～5カ月、納豆6～9カ月となっている。鶏肉・豚肉は6～9カ月、牛肉7～9カ月、レバー6～8カ月、卵類4～7カ月、牛乳・乳製品4～7カ月、しらす干し・かれい6～7カ月、いわし・さんまは11～12カ月、そして野菜類は4～6カ月に与えられている。

本調査の結果を以上の資料と比較してみると、本調査の方が食品を早い時期に与えている傾向がみられた。とくに肉類・チーズおよび魚類など、脂肪の多い食品が早い時期に与えられている。本調査と他資料とで与える時期が一致しているのは穀類・豆腐・卵類・牛乳・ヨーグルトなどである。

乳児の消化機能の発達からみると、脂肪の消化吸収に重要な役割を果たす膵リパーゼは2歳頃になって成人値に達するといわれる。なお、体重の低い児ほど発達は未熟で、摂取脂肪から受ける影響[14)15)]は大きい。また、たん白質は体構成成分として重要な栄養素であるが、乳児では未消化のまま吸収されやすく、これが原因でアレルギーを起こす場合もある。とくに、牛乳・卵・大豆製品は与える月齢が早すぎたり、多量に与え続けると乳児の消化能力に適応できずそのまま吸収されアレルゲンになりやすい[14]。糖質は栄養素の中でも消化吸収がよく、乳児でも糖の処理能力はほぼ完全であるといわれている[16]。

乳児に初めて与える食品として、米やうどん・パン・じゃがいもなどの糖質性の食品が好ましいとされるのは以上の理由によるものである。動物性の食品は、乳幼児の発育に不可欠であるが、その食品に含まれる脂肪の量に注意しなければならない。例えば、肉類でも鶏肉は脂肪が少ないと一般には理解されているが、部位によっては相当量の脂肪を含んでいる[17]。また、白身魚についても種類によっては脂肪の量に差がみられる。

今回の調査では、母親が児に与える食品のうちとくに肉類と納豆は、保健所での食事指導よりも約4カ月早く与えられており、消化機能やアレルギーなどの問題を考えなければならない。そのようなことから、本調査の対象施設であるB施設では、「アレルギーを起こしやすい食品は与える時期を遅らせる」という方針に基づいて一般には4カ月に与えられている卵黄や納豆を7カ月頃としている[18]。

一方、食品の与え方については食べやすい調理形態すなわち、軟らかいものから硬いものへと徐々にならすことが大切である。二木は離乳期の食事は「食品主義」から「調理形態主義」の方式をとるべきであると述べ[19]、中山も「乳児の摂取能力に応じて進めればよい」[20]としている。

本調査では、米・卵・じゃがいもについて月

齢ごとの調理形態の変化をみたところ、米の調理形態には順序性がみられたが、水野らの結果と比べて「重湯」から「ごはん」に至るまでの期間が短かった。

卵の調理形態については、「軟らかい」から「硬い」までの調理の段階は米の場合と異なり明確ではなかった。水野ら[21]は、乳児の食物の受容性（すなわち、食べ易さ・飲み込み易さ）の難易は食物の水分含量、口当たりのなめらかさ、繊維の硬軟や長さによって左右されると報告している。卵の調理形態は、適度な加熱状態で乳幼児が飲み込み易い硬さであれば、とくに順序性に問題はないと思われる。ただし、加熱が不十分であるとアレルギーを起こすこともあるので注意を要する。

今後、乳幼児の食事は児の消化機能やアレルギーなどを考慮して、早く与えすぎない指導、すなわち与える時期の適切な指導および咀しゃく機能に応じた調理形態の指導が必要と考えられる。

2. 食行動の発達と問題の食行動について

食行動にかかわる手指の発達について、Green & Richmond は手と眼との協調運動によると述べている[22]。4カ月になると眺めた哺乳びんに手を触れることができるようになり、6～7カ月では哺乳びんを口へもっていくことができる。7～10カ月には自分で哺乳びんから飲むことができ、10カ月でスプーンの使用が可能になる。さらに、12カ月を過ぎるとコップを上手に扱え、12～18カ月では下手であるが一人食べができると述べている。また、デンバー式発達スクリーニング検査[23]によると物を持つことができるのは8～10カ月であり、コップから飲むことができるのは11～15カ月であるといわれている。

本調査結果でも飲む・噛むなどの摂食行動と哺乳びんを持つ・スプーンを持つなどの持つ行動の発達とは合致していた。

飲む行動は、哺乳びん飲み・ストロー飲み・コップ飲みへと発達し、さらに一人食べに至る。それらの行動については、二木[24]の咀しゃく能力の発達段階とやや時期はずれてはいるが、その順序性については順調な発達とみることができる。

摂食行動は、複数の行動を同時に行うことが多く、一つの行動を繰り返す練習期を経て複雑な行動が可能になると思われる。

◦スプーンを持つことができる
　……口に入れることができる
◦コップを持つことができる
　……一人で飲むことができる
◦固形物を食べることができる
　……一人で食べることができる

など食行動の順調な発達を促すためには、養育者が「スプーンで口にいれてあげる」「ささえて飲ませる」「一緒に食べる」など喫食の援助や「繰り返し食べさせる」摂食の学習が大切である。

また、「噛んでも飲み込めない」「口の中にためる」など咀しゃく機能の発達に問題のある児もみられたが、この問題は児が「噛めない」「飲み込めない」のか、あるいは「噛まない」「飲み込まない」のかなどの論議もあり、その状態の捉え方については、今後さらに検索したいと考えている。

児の問題となる食行動は、母親から「困ったことがある」と訴えのあった食行動として捉えてみたところ13項目におよんだ。その中で、「食品の好き嫌い」と「口にためて出す」の訴え率が高かった。

問題の食行動は発達経過に発生する行動であるのか、あるいは児への対応や配慮など母親の養育態度によるものかは十分検討されなければならない。

とくに、摂食に関する機能や行動の発達は、学習によって獲得できると考えられるので、いつ、いつまでに、どのような方法でこれを体験させるかを知る必要がある。

今回の調査でみられた「食品の好き嫌い」は、ほとんどの児は3カ月後に消失している。しかし、3名の児は、この訴えが長い期間続いていた。

それらの児は、母親との関係が円滑でなく、摂取食品数が著しく少ないことがわかった。とくに離乳初期の食品数が少ないことからみても、食事体験の乏しい状態が観察された。

食品と出会う離乳期こそ、多くの食品を体験させる必要があると同時に、それを食する環境、

すなわち母とのかかわりの好ましさが重要な条件となると考えられる。

また、咀しゃく能力の臨界期は、18カ月とされている。対象児の中には、19カ月になっても「飲み込めない」「口にためて出す」の行動がみられる。

咀しゃくに問題のある児は、食品数の増減や問題の食行動がみられ、さらに母親との関係が円満でないなどの共通点がみられた。

咀しゃくの発達については、養育者の援助による学習と、咀しゃく能力に適した調理形態の工夫が必要である。

3. 母子相互交渉から見た食生活

(1) 問題の所在

前年度までの私たちの研究では、いわゆる「食事トラブル」が養育環境あるいは母親の養育態度との関連を示唆する調査結果を得ていた。

それを受けて、本年度の研究計画の一つに、乳幼児の母子関係に関する追跡的な意識調査がある。分担研究課題に取り組む第3年目として、引続き「母子間の心理的相互関係」に留意して、そこから改めて食生活の様態を探る方向に仕事を進めてみることにした。

従来、食事の問題は育児や保育の分野では主要な関心事の一つであった。家庭にある母親ばかりかとくに乳幼児の保育に携わる第一線の専門職にとっても、家庭における食事指導の問題では、栄養面と同様かあるいはそれ以上に、心理的な側面からの親への援助的な役割を遂行する必要性が、予想以上に高まっている現実があった。そこでそのことをふまえつつ、本研究の計画の一環として、予備的検討課題として研究の方法についての考察を試みることにした。

そのためにまず第一に、一つの心理的事態としての食生活場面での母子関係に着目してみることにした。

(2) 調査研究の目的と方法

検討の過程で、この研究の当面の目的を、「生活場面における母子間の心理的な相互交渉の現実を追跡的に捉える」こととした。

まず、母子関係を探る独自の方法を検討してみることにした。第一にその作業のための基本的な前提条件としては、以下の通りである。

- 母と子の関係を、力動的な相互作用として捉え得るものであること。
- 母親自身が子どもと自分自身のかかわりの日常を振り返って自己診断が可能な方法であること。
- しかも現実の日常的な生活のなかで比較的容易に定期的なチェックが可能な方法であること。

以上の3点に留意した。第二に、母子の相互交渉を捉える観点を「生活場面」と「かかわり」の二つの次元を設定して内容を検討した。その結果、生活の場面は当面の課題である「食事」の場面に加えて「排泄」場面を取り上げた。食事と排せつの二点がおおむね育児における母親の日常生活の主要な関心事であることから、その場面での通常的な様態を捉えることが適切であると判断したからである。

一方、「かかわり」については、親の養育態度を原因とし、子どもの行動を結果と見なすような捉え方ではなく、双方の力動的な関係として見てみようとする観点から以下のような事項に絞ることにした。

まず、母親の側のチェック項目は

- 子どもの「要求」の理解度
- 子どもの反応への対応の適切さ
- 子どもとのかかわりの円滑さ

の3点から判断することとした。

また、子どもの側の状態の判断を

- 生活場面における子ども自身の要求の表現の適切さ
- 生活場面での子どもの行動の習慣化への評価
- 生活場面における子どもの興味関心の程度

の3点をもって判断することにした。

以上のような合計6項目について、母親自身の判断を5段階の評定でチェックしてもらうことにした。これらの質問紙は表7および表8の通りである。これらは図9のような円状グラフに表し、かかわりの状態像を一目で概観できるように工夫してみた。

なおこの質問紙調査は、本研究の一つである「食行動の追跡」と同一の研究対象者の協力を得て、同じ時期に併せて行っている。

(3) 調査結果

表7　質問の実際

次の2つの生活場面で、お子さんの状況にあてはまるところに○印をつけてください。

1. 最近、お子さんは自分からしてほしいことや、したがることなど、この場面でどのくらい自分の要求を表わしますか。

生活場面	非常に強く表わす	どちらかといえば強く表わす	どちらともいえない	どちらかといえばわし方が弱い	全く表わし方が弱い
1 食事の場面					
2 排泄の場面					

2. この場面に関して最近のお子さんの行動の仕方ではどのくらい習慣ができていますか。

	非常に着実	どちらかといえば着実	どちらともいえない	どちらかといえばできていない	全くできていない
1 食事の場面					
2 排泄の場面					

3. この面に関して最近のお子さんの興味や関心などはどの程度ですか。

	非常に興味関心が強い	どちらかといえば興味関心が強い	どちらともいえない	どちらかといえば興味関心が弱い	全く興味関心が弱い
1 食事の場面					
2 排泄の場面					

表8　質問の実際

次の2つの生活場面でお母さんの状況にあてはまるところに○印をつけてください。

1. 最近お子さんの要求に対してお母さんはどのくらい理解しているとお考えですか。

生活場面	非常によく理解している	どちらかといえば理解している	どちらともいえない	どちらかといえば理解してやれない	全く理解できない
1 食事の場面					
2 排泄の場面					

2. 最近のお子さんの要求に対してお母さんはどれぐらい応じているとお考えですか。

	非常によく応じている	どちらかといえば応じている	どちらともいえない	どちらかといえば応じていない	全く応じていない
1 食事の場面					
2 排泄の場合					

3. 最近のこの場面でのお子さんのやりとりはどれぐらい順調にいっているとお考えですか。

	非常に順調にいっている	どちらかといえば順調にいっている	どちらともいえない	どちらかといえば順調にいっていない	全く順調にいっていない
1 食事の場面					
2 排泄の場面					

二つの「生活場面」で、六つのかかわりの状態が、母親によってチェックされた結果をもとに、母子相互の関係のパターンを3つに区分してみた。

第一は、その場面における子どもの要求や関心と、それに対応する母親の反応とが、うまくかみ合い、全体を概観してみて、少なくとも「いいかかわり」であるという、母親自身の実感がチェックの結果に示されていると判断できるものである。

またこの「群」は二つの生活場面のいずれもがおおむねいいかかわりの中で展開していると

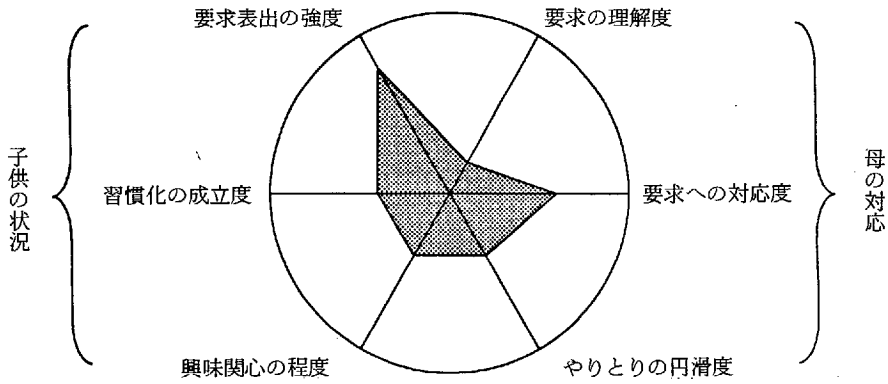

図9　生活場面における母子のかかわり

いう母親の評価を得て、際だった違いを現していないことが特徴である。

これをここでは「関係良好群」と命名した。図10の事例Aはこの群の一例である。

なお、この場合、5カ月・8カ月・12カ月と順に母親の評価は自分の納得のいくかかわりへと変化していることも示されている。

第二は、それとは反対に、食事の場面における母子の相互関係が、比較的「ぎこちない」かかわりかたを示している場合である。このような傾向を示すものを「食事問題群」と名付けた。しかも、この場合の「排泄場面」の母子関係はおおむね「特に問題のない状態」と判断できる傾向を示していることが前提となっている。

しかし、中には図11に示す事例Bのように、今回の対象者の中でも、母親の生活場面の自分と子どもとのやりとりに満足していないとみられる例もある。例えば9カ月の状況のようにかなり顕著な食事場面でのぎこちなさを感じさせる評価が特徴である。13カ月の場合は一応かかわりに対する評価が好転しているが、この事例Bにおいてもこの群に入る他の事例と同様に、母親と子どもとの「かかわりのぎこちなさ」を示すところが顕著であるといえる。

第三は、食事場面では母子相互のかかわりには問題はないのに、排泄場面の対応のぎこちない状態を示すもので、ここでは「排泄問題群」と命名した。図12の事例Cはその例である。食事場面の評価が母親にとって満足のいくものであるとわかるが、排泄場面の自分と子どもとのかかわりは納得できないと判定している結果が顕著であった。

以上、食事・排泄の2場面に着目し、母子相互の関係の状態から得られた事例の実数は、「関係良好群」が9ケース、「食事問題群」が9ケース、および「排泄問題群」が20ケース合計38ケースとなった。

この3群のそれぞれが、食行動に関してなんらかの問題があると判断されるかどうかを栄養指導上の観点から判断してもらった結果は、表9のようになる。

以上の結果から次のようなことが考えられる。

① 食事場面の母子関係がいいかかわりであると母親自身の納得ができる場合（ここでは「関係良好群」）、幼児の食行動上の問題も少ないとみられること。

② 食事場面の母子関係がぎこちないかかわりを示すと考えられる場合（すなわちここでは「食事問題群」）、幼児の食行動上の問題をもつと判断できるものが多い傾向にあるとみられること。

③ この2点から見る限り、食行動上の問題が、ある程度は母親と子どものかかわりいかんによるとみられ、栄養面同様かそれ以上に心理的な交流の場としての食事場面への配慮を促す指導が必要になること。

④ 食事以外の、他の生活場面の問題（ここでは「排泄問題群」）に着目した場合、食行動上の問題の有無とは一義的な関連を予測させる傾向は認められず、少なくとも母子関係

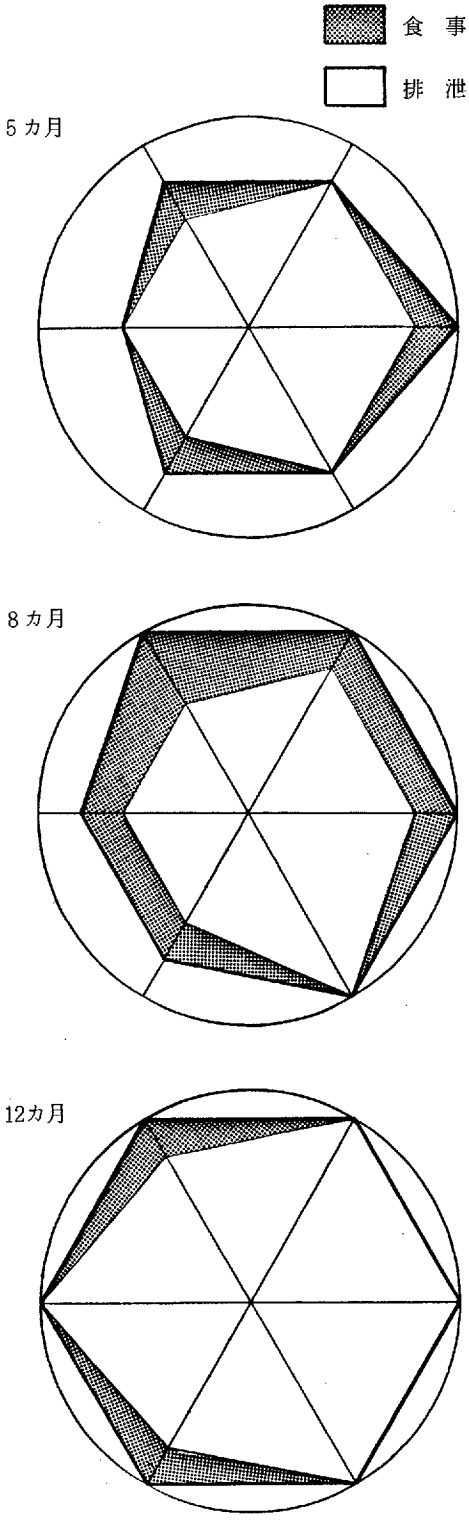

図10　母子相互交渉からみた食行動
事例A（関係良好群）

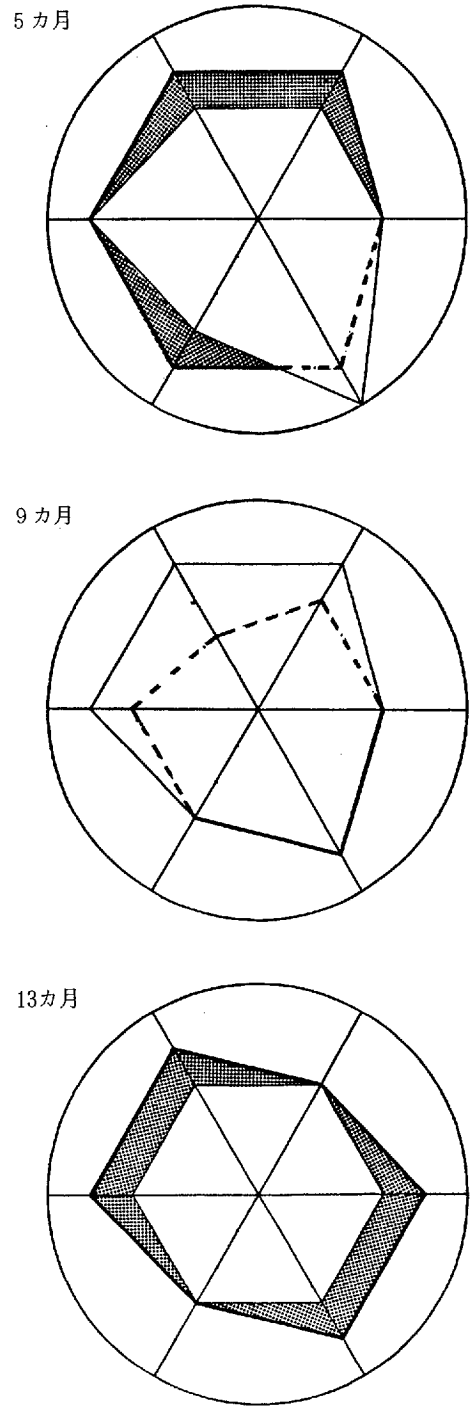

図11　母子相互交渉からみた食行動
事例B（食事問題群）

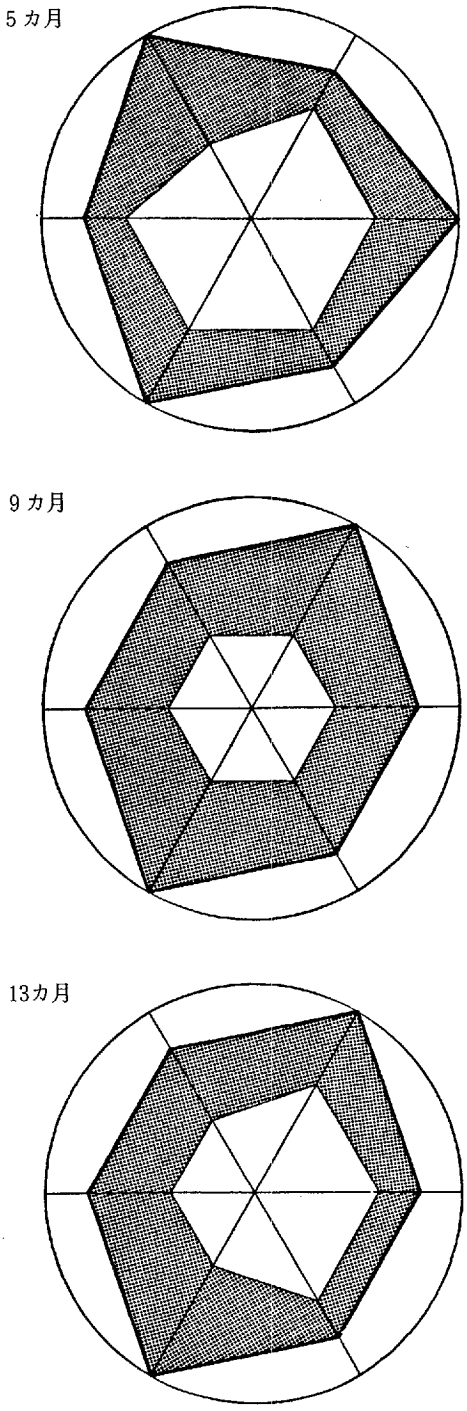

図12　母子相互交渉からみた食行動
事例C（排泄問題群）

表 9　母子相互交渉からみた食行動

（人数）

	問題あり	問題なし
関係良好群	2	7
食事問題群	6	3
排泄問題群	8	12

の様態を究明する場合「排泄」と「食事」の双方は生活場面としては独立していると考えられること。

⑤　この二つの生活場面の母子関係において、その双方に問題があるとみられるケースがあったのかどうかについては、追跡的なチェックを全般的に概観するところから検討した結果、今回の調査対象の38ケースの中には該当する事例はなかったこと。これは今回対象者の特性の問題として留意すべきこと。

⑥　発達上の特定の月齢に留意して、かかわりのぎこちなさの傾向の有無を検討してみたが、一般的な顕著な傾向は見いだせなかった。

⑦　母親の自己診断的な方法として前述の着目点の基底的な事項として、母子接触とりわけ「身体的な接触」と母親からの「愛着」、子育ての「楽しさ」といった「状況の把握」が、今回の調査では取り上げられてはいないが、今後はこの点を十分に考慮する必要があること。

⑧　心理的な側面の自己診断法は、それ自体が及ぼすと考えられる波及効果をもつと臨床的にいわれており、この点から一定間隔を置いてのチェック行為が、しばしば問題の自覚化を促し、調査に協力することで、かかわりの「軌道修正」をしたり、あるいは回答が意図的に「望ましさ」の正解を強制する結果になることを銘記する。

⑨　実際の母子相互作用の状態を描出できるなんらかの補助的手段を援用することが望ましい。特にビデオ画像の収録などは、母子のかかわりの自己診断の資料を分析する場合の有効な情報を提供してくれる可能性をもつこと。

⑩　母親の自己診断的な質問紙による母子相互のかかわりのディテイルについては、なお母

の「理解度」、「対応の適切さ」、「かかわりの円滑さ」と、子の側の「要求表現の適切さ」、「習慣化」、「興味関心」などとのより一層の分析検討を今後の課題として残していること。

以上、本研究は横断的調査を経て、本年度の追跡調査を実施することにより、それぞれの児の食行動の発達過程とその変化の様相を捉えることができた。

さらに、乳幼児の行動の捉え方についても、研究者側からみた行動の捉え方ではなく、母親を通してみた児の実態に触れることができた。すなわち、母親は継続的に児を観察し、記入可能な行動状態を選択しているからである。この研究の成果として、家庭の中で受け止め易い児の食行動状態を確認することができた。

また、乳幼児の食行動を追跡することによって、順調な食行動の発達を促すには、離乳期の豊富で順序のある食体験と、母子の好ましいかかわりなどの必要性が立証された。

参考文献

1) 二木武他：口の働き「食」機能を中心に、小児保健研究、43(6)、547～561、1984
2) 赤坂守人：子どもの口の働きと食生活、食の科学、99号、59～65、1986
3) 矢沢正人：乳幼児の摂食困難に関する調査第31回日本小児保健学会講演集、1884
4) 広瀬由治：小児の摂食機能に関する研究、小児保健研究、47(3)、405～410、1988
5) 光山玲子他：乳幼児における最近の食生活の傾向、第30回日本小児保健学会講演集、1983
6) 大関武彦：小児における摂取異常：臨床栄養、94(3)、285～291、1989
7) 鈴木淑子：幼児の食生活に関する調査、小児保健研究、44(3)、321～326、1984
8) 東京都衛生局公衆衛生部：昭和62年幼児栄養基礎調査結果の概要、1988
9) 東洋他：母親の態度・行動と子どもの知的発達―日米比較研究―、東京大学出版会、1986
10) 古沢頼雄：乳幼児期における母子関係研究総合乳幼児研究、1(3)、1977
11) 厚生省児童家庭局母子衛生課監修：昭和55年乳幼児身体発育値、母子衛生研究会、1981
12) 今村栄一編著：離乳の基本、医歯薬出版、1982
13) 西村輝子：松江市における生後3カ月から17カ月までの乳幼児の食事について（第1報）小児保健研究、43(1)、57～65、1984
14) 安藤格他：母性小児栄養学、医歯薬出版、1987
15) 阿部達夫他：新栄養生理学、医歯薬出版、1983
16) 馬場一雄：小児生理学、へるす出版、1983
17) 科学技術庁資源調査会編：「四訂日本食品標準成分表」準拠、第一出版、1984
18) 慈愛会保育園著：離乳食、芽ばえ社、1987
19) 小林登・馬場一雄編集：小児科MOOK、小児栄養のすべて、金原出版、1983
20) 中山健太郎：小児栄養の実際第10版、医学書院、1987
21) 水野清子他：離乳期における乳及び離乳食に関する研究―調理形態―小児保健研究、34(3)、120～127、1975
22) Green, M. & Richmond, J.B. : Pediatric Diagnosis, W.B.Saunders Co., Philadelphia, 1955
23) 高野陽他編：母子保健マニュアル、南山堂、1986
24) 二木武他：小児の栄養行動、医歯薬出版、1984
25) 小嶋謙四郎他編：小児の臨床心理検査法、医学書院、1973
26) 日本保育学会編：家庭の養育態度、保育学年報1985版、フレーベル館、1985
27) 無藤隆他編：子どもの時代を豊かに－新しい保育心理学、学文社、1986
28) バートン、ジョーンズ編(岡野恒也監訳)：乳幼児のヒューマンエソロジー、ブレーン出版、1987
29) 前川喜平、三宅和夫編：発達検査と発達援助、別冊発達第8巻、ミネルヴァ書房、1988

Abstract

Studies on Bringing-up Conditions Influencing the Eating Behaviors of Sucklings and Infants

Kazuko Yaguramaki*, Teruko Murata*, Kayo Morioka*, Sachio Oba*,
Setsuko Omori**, Akira Takano**, Masahiro Takaisi**, Kiyoko Mizuno****

The authors traced the eating habits of sucklings and the rearing attitudes of their mothers in the order from mother to child, realized the situations of the development and the change in them, and the contact between mother and child was examined.

Subjects for investigation : A Institute where mothers are taught how to bring up children, and 38 children of B Institute where the children are brought up privately.

The period for investigation : From October 1987 to October 1988 The investigations were performed every 3 months at A Institute and every 2 months at B Institute.

Results:

1. Real situation of food intake

1) The foods presently given to children : The kinds of foods in 4 to 5 months were 25, which were gradually increased with then growth, and became 120 kinds in total in 20 months. Starchy foods, 'natto', egg yolk, lactic acid beverage, fish white meat, vegetables and fruits, were given them in 4 to 5 months, while meats, oils, fats, and fatty fish meats, were given in 6 months or later.

2) The number of foods : The average number of foods per child was 15 kinds in 5 months, 40 kinds in 9 months, and 60 kinds in 13 months, and thus the increase during the period in 5 to 9 months was remarkable.

3) Cooking style : Cooking of the rice varied from thin rice gruel, to rice gruel, and to rice, as the child grew, and an order of the cooking style was noted, but no order of the cooking style of eggs from soft to solid was observed.

2. Eating habits

1) Eating habits classified by the age : In 8 to 10 months babies began to hold a spoon or a nursing bottle. Their drinking habit developed in 10 to 15 months from a nursing bottle to a glass. They began to chew and swallow foods in 8 to 13 months, and they were able to eat solid foods in 8 to 14 months, and the majority of them were able to eat foods by themselves.

2) Eating habits complained of by the mothers : The eating habits of infants complained of by the mothers, as classified by the age, ware 37.7% (14-18 months).

The number of eating habits against which complaints were given was 13, and the highest number of complaints were given against the likes and dislikes of foods, mostly in 14 to 18 months. Another complaint against chewing the foods but vomits out of the mouth became oftener as the age advanced. Further, those who took too much time for eating were observed in each age group, and those who eat too little occupied a high rate at ages later than 14 months. Four to 5% of them were allergic at each

age group in 5 to 18 months.

3. Eating habits as seen from the contact between mother and child.

Their contact was studied from the aspects of the children's requests, customs and interests as well as the mothers' understanding, responses, and liaison.

(1) When the contact is good, not much problem seems to exist in children's eating habit.

(2) When it is not so good, problems seem to increase.

検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

要約
乳幼児の食行動と母親の養育態度について縦断的に追跡し、発達・変化の状態を捉え、母子相互交渉についても検討した。